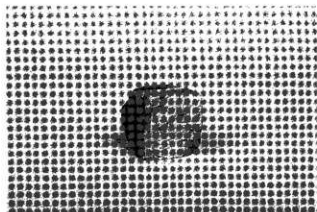


# 本渡城跡



本渡城跡出土石製印鑑「常秀之印」

2010年

天草市教育委員会

## 序 文

本書は、平成 17～21 年度にかけて行ったまちづくり交付金事業の基幹事業である天草切支丹館の改築及び城山公園の整備に伴い実施した本渡城跡の調査成果をまとめた報告書です。

本渡城跡は、本戸城・本砥城などとも記述され、天正十七年(1589年)に起きた天正天草合戦の舞台となった中世城郭です。豊臣秀吉が九州を統一した後、肥後国は秀吉の腹心である加藤清正と小西行長が治めることになりました。ここ天草は行長の統治下におかれ、従来より天草を治めていた天草五人衆という地方領主たちも行長の与力となります。五人衆が行長の宇土城築城への協力を拒んだことから天草での戦となり、本渡城は小西行長・加藤清正らの連合軍によって攻められることになりました。これが天正天草合戦と呼ばれる戦いです。城主である天草伊豆守種元は本渡城の守りを固め頑強に抵抗しました。種元は洗礼名をドン・アンドレというキリシタンでもあったことから、城内にいた宣教師や周辺に住むキリシタンたちも城に立て籠もったと言われています。壮絶な戦いの後、天草勢はついに力尽き、城主種元は自害、多くのキリシタンの命とともに本渡城は落城しました。この戦いの様子は、天草キリシタンの悲劇として宣教師ルイス＝フロイスによってくわしく記録され、ローマへ報告されています。本渡城跡はこのような希少な歴史背景を持つ城郭として、またキリシタン関係遺跡としても大変重要な歴史遺産です。

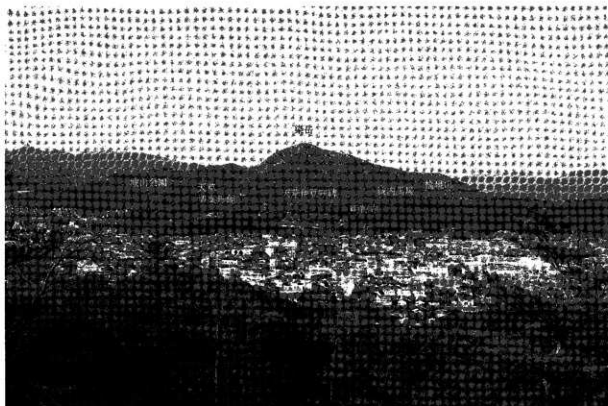
今回の事業における調査範囲はわずかなもので、残念ながらキリシタンに関連する遺構や遺物は出土しませんでした。16 世紀中～後半頃の焼土面が確認され、多くの土師器が出土するなどの成果が得られました。また、かつて昭和 30 年代の道路開削や同 43 年の天草切支丹館建築に伴う造成の際に採集され、保管されてきた城跡出土遺物に関する報告も収録しております。これらの調査によって、本渡城の歴史の中で、特に記録に留められていない部分の歴史を解明していくために必要な情報の一端が得られたと考えております。

本書が学術研究等の資料として活用され、また広く文化財に対する理解の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査・整理作業にあたりご指導、ご支援を賜りました関係者、関係機関の皆様へ深く感謝申し上げます。今後ともなお一層のご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 22 年 3 月

天草市教育委員会 教育長 岡部 紀夫



本渡城跡全景(広瀬公園より撮影)

#### 例言

1. 本書は、熊本県天草市船之尾町に所在する本渡城跡の調査報告書である。
2. 調査は本渡中央北地区都市再生整備計画に基づく、天草切支丹館の改築及び城山公園整備事業に伴い実施した。平成18～20年度までの主な調査は文化課文化財保護係 松本博幸(現天草切支丹館管理係)が担当したが、平成21年4月の人事異動により、文化課文化財保護係 中山圭が担当を引継ぎ報告書作成を実施した。
3. 周辺地形測量は総埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
4. 出土遺物の実測、製図作成は九州文化財研究所に委託した。
5. 遺構図面の整理、トレースは平成20年度、21年度に行い、20年度は泉あかね、吉田さおりの助力を得て松本が、21年度は吉田さおりの助力を得て中山が行った。
6. 遺物の写真撮影は中山が行った。
7. 陶磁器の分類は主に、青磁について上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」、白磁について森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」、青花について小野正敏「15・16世紀の薬付碗・皿の分類と年代」(いずれも『貿易陶磁研究No.2』1982 貿易陶磁研究会)を参照した。
8. 「本渡城」の表記は史料により本戸城、本砥城、馬場城と異なる表記が使用されるが、本書においては原則として本渡城という呼称に統一して使用している。
9. 編集は天草市教育委員会文化課において中山が行なった。

## 本文目次

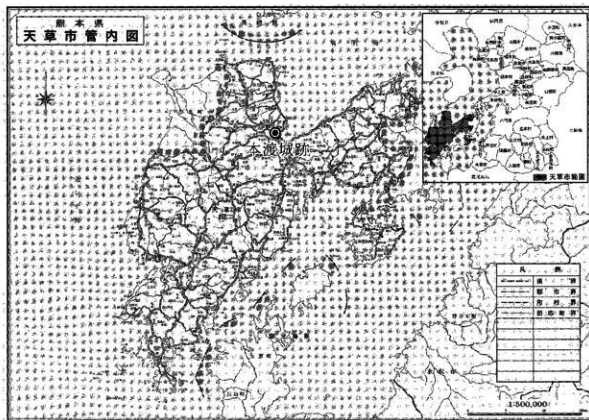
序文	
例言	
第 I 章 はじめに	1
第 II 章 位置と環境	
第 1 節 本渡城跡の位置	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 3 節 本渡城跡に関する歴史	6
第 III 章 調査の成果	
第 1 節 調査の概要	10
第 2 節 採集遺物出土遺物について	11
第 IV 章 まとめ	27
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図挿表目次

第 1 図 本渡城跡位置図 (1/500000)	目次下
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/20000)	4
第 3 図 本渡城跡周辺地形図 (1/5000)	5
第 4 図 天草の中世城館分布図	7
第 5 図 本渡城跡地形測量図 (1/100)	8
第 6 図 c1 トレンチ平面図・断面図 (1/40)	10
第 7 図 d1～d3 トレンチ平面図 (1/100)	12
第 8 図 d1 トレンチ土器出土状況平面図 (1/20)	12
第 9 図 昭和 30～40 年代採集遺物実測図 I (1/3)	13
第 10 図 昭和 30～40 年代採集遺物実測図 II (1/3)	14
第 11 図 昭和 30～40 年代採集遺物実測図 III (1/3)	15
第 12 図 昭和 30～40 年代採集遺物実測図 IV (1/3)	16
第 13 図 昭和 30～40 年代採集遺物実測図 V (1/3)	17
第 14 図 b1 トレンチ出土遺物・平成 13 年採集遺物実測図 (1/3)	18
第 15 図 c1 トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	19
第 16 図 平成 20 年採集遺物実測図 (1/3)	20
第 17 図 d1 トレンチ出土遺物・石製印鑑実測図 (1/3)	21
第 18 図 本渡城跡出土遺物組成グラフ	23
第 1 表 調査組織年次別一覧表	2
第 2 表 本渡城跡出土遺物点数表	23
第 3 表 出土遺物観察表 I	24
第 4 表 出土遺物観察表 II	25
第 5 表 出土遺物観察表 III	26

## 写真図版目次

- 図版 1 c1トレンチ調査写真  
 図版 2 c1トレンチ・d1トレンチ調査写真  
 図版 3 d1トレンチ調査写真・表採・出土遺物写真1  
 図版 4 表採・出土遺物写真 2  
 図版 5 表採・出土遺物写真 3  
 図版 6 表採・出土遺物写真 4  
 図版 7 表採・出土遺物写真 5  
 図版 8 表採・出土遺物写真 6  
 図版 9 表採・出土遺物写真 7  
 図版 10 表採・出土遺物写真 8  
 図版 11 表採・出土遺物写真 9  
 図版 12 表採・出土遺物写真 10  
 図版 13 表採・出土遺物写真 11  
 図版 14 表採・出土遺物写真 12  
 図版 15 表採・出土遺物写真 13  
 図版 16 表採・出土遺物写真 14



第1図 本渡城跡位置図(1/500000)

## 第I章 はじめに

本渡城跡は天草諸島を代表する中世城館である。天草下島を治めた天草氏の重要拠点としての役目を担い、天正十七(1589)年に起きた天正天草合戦の舞台となったことで知られる。史料によっては本戸城・本砥城とも表記されるが、本書においては原則として本渡城という呼称を採用している。

熊本県本渡市では平成16年、国土交通省のまちづくり交付金事業を活用した本渡北地区の再整備を計画した。平成17年3月には具体的事業を示した「本渡中央北地区都市再生整備計画」を策定、平成17～21年度にわたり事業を実施することとなった。この事業では本渡市立天草切支丹館(高次都市施設)の改築と城山公園(高質空間形成施設)の圍路整備・バリアフリー化が基幹事業と定められたが、これらの計画箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地「本渡城跡」の範囲内にあたることから事業に文化財調査の予算も編成された。なお、天草切支丹館は改築後に天草キリシタン館と名称を変更する予定となっている。

まちづくり交付金事業がスタートした平成17年当時、本渡市教育委員会に埋蔵文化財の試掘確認調査に対応できる職員が不在であったため、同教育委員会は調査を熊本県教育委員会に依頼し、平成17年11月に城山公園、翌18年2月に天草切支丹館前庭部分の試掘調査が実施された。結果、天草切支丹館の前庭部は昭和43年の建設に際して行われた地形改変が顕著で遺構・遺物とも確認されなかったが、城山公園の試掘調査では本渡城跡に伴うと見られる遺構及び遺物が検出され、事業を進めるために文化財保護行政の体制整備が急務となった。

平成18年3月に、天草郡市2市8町が合併し天草市が発足。天草市教育委員会に新たに文化課が組織され、まちづくり交付金事業にかかる本渡城跡の調査が引き継がれた。城山公園の整備にあたっては、基本的に遺構を破壊しない盛土工法で遊具等各施設を設置することとし、また天草切支丹館は建築時にかなりの規模の地形改変がなされていたことが判明したため、大規模な調査は発生せず、必要に応じて専門職員の立会調査を実施して対応した。平成19年1月に天草切支丹館周囲の遺構残存状況を確認したところ、建物背面側の南に設定したトレンチ(b1トレンチ)から焼土面と見られる層とともに、炭化物や中世土師器片が出土したが、残りのb2～4トレンチでは遺構・遺物は出土せず、天草切支丹館の周囲は極めて限定された部分のみ、埋蔵文化財が遺存している状況が判明した。

平成20年1月、城山公園南側のトイレ付近のよう壁付け替え工事の立会時に埋蔵文化財が出土したために急遽、発掘調査を実施した。検出遺構が岩盤掘込のピットであったため、記録保存の後、市都市計画課と協議を行い、よう壁の設計を変更、遺構が残る岩盤を掘削せずによりよう壁の背面に埋め込む形で保存している。

平成21年1月、切支丹館前庭南端部で土師器皿が採集されたので、調査を実施した。設定したトレンチがd1～3トレンチで、このうちd1トレンチのみ埋蔵文化財が確認されている。このように工事立会と小規模調査を適時実施し、ここまで良好な遺構の検出には恵まれていないものの、遺物については一定量が出土している。

昭和30年代に実施された公園道路開削及び昭和43年の本渡市立天草切支丹館開館に先立つ建設工事に際しては、まだ埋蔵文化財行政への理解が浸透していない時代であったために、正式な発掘調査が行われなかった。このため、城跡の重要な箇所が損壊することとなったが、当時本渡中学校教諭であった鶴田倉造氏の下、本渡中学校郷土クラブの生徒達が中心となって出土した遺物を採集している。採集資料は天草切支丹館で長く展示されてきたが、切支丹館改築中の現在は、天草市教育委員会が保管している。完形の土師器皿・杯を中心に龍泉窯系の青磁類などが見られる良好な資料である。天草の城館遺跡出土の土師器としては抜きん出て完形の資料が多い。先学の努力の結晶であるこれら資料群につい

では、図化整理が行われていなかったため、報告の必要性に迫られていた。

本書は発掘調査による成果に加え、上記の採集資料の報告も含めた調査報告書とした。

なお、平成18～20年までの調査を担当した松本が、平成21年4月より異動となったため、本書の執筆編集は中山が引き継いで実施した。

	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
調査主体	天草市教育委員会	天草市教育委員会	天草市教育委員会	天草市教育委員会
調査責任者	教育長 岡部紀夫	教育長 岡部紀夫	教育長 岡部紀夫	教育長 岡部紀夫
調査総括	教育部長 新 勲 文化課長 長山一幸	教育部長 新 勲 文化課長 長山一幸	教育部長 嶺 力 文化課長 長山一幸	教育部長 嶺 力 文化課長 山越利幸
庶務担当	文化財保護係長 平田豊弘	文化財保護係長 尾上和人	文化財保護係長 尾上和人	文化財保護係長 尾上和人
	主事 川邊翔平	主事 川邊翔平	主事 川邊翔平	主事 川邊翔平（～6月） 主事 織輪麻由（7月～）
調査担当	主査 松本博幸	主査 松本博幸	主査 松本博幸 （整理作業含む）	学芸員 中山圭 （整理作業・報告書作成）
調査作業員	井上ウメ子 岡部聖美	井上ウメ子 岡部聖美	井上ウメ子 岡部聖美	
整理作業 補助員			泉あかね 吉田さおり	吉田さおり

第1表 調査組織年次別一覧表

## 第二章 位置と環境

### 第1節 本渡城跡の位置

天草諸島は九州中央西部に位置し、大小あわせて110余りの島で構成されている。その範囲は東西約48km、南北約44kmに及び、北は長崎県島原半島、東は熊本県宇土半島、南は鹿児島県長島と字状に隣接し、古来より九州西岸の交差点として海上交通の要衝を成してきた。諸島は下島・上島・大矢野島の3島を中心に複雑な形状を呈し、入り組んだ海岸線を有している。比較的波が穏やかな明海不知火海に面する地域は緩やかに浜辺が広がるが、外海である東シナ海に面する海岸線は激しい波浪で侵食され、断崖地形が卓越している。海岸線からたちまち隆起し丘陵を成す地形が島の大半を占めており、総じて平野部の面積は少ない。現在、集落が営まれている一定規模の平野部も近世以降の干拓によって作られたものが少なからずあり、中世以前の平野部となると極めて稀である。

本渡城跡は天草諸島最大の島、天草下島の中央やや北より、天草市船之尾町に位置する。城跡周辺は天草では貴重ともいえる本渡地区の平野が広がっており、現在は天草市の中心市街地を形成しているが、城跡の所在地名「船之尾」が示す通り、本渡城が機能していた時代まで、城の付近まで遠浅の海岸線が迫っていたと考えられている。城は半河内方面の低山から東へ連なる山稜の突端に築かれた。城跡の範囲については、これから詳細な検討が必要となるが、「城の平」の字名を持つ山(権現山或いは惣陣山)から城山公園丘陵までの区域におさまる城郭と思われる。標高は「出丸」と呼ばれる城山公園丘陵部(殉教戦千人塚所在地)で約32m、かつて「二の丸」と呼ばれ天草切支丹館が立地していた丘陵部が標高約45mである(註1)。両曲輪では15～16世紀の出土遺物が豊富に発見されており、城の一角として機能していたことは疑いが無い。天草切支丹館の曲輪から西へは、一旦、野首状に地形が落ち込み、そこから斜面がさらに西へ登り標高約60mを超えた地点で平坦地となる。ここには落城時に白刃した城主天草伊豆守種元の碑が建立され、客将であった木山弾正の供養塔も有る。斜面東～北面は現在は墓地となっている。さらにここから北へは150mほど尾根状に土橋状の道が続くが、これを城内馬場或いは馬乗り場という。城内馬場が突き当たる北側の丘陵が権現山(惣陣山)で山頂標高約77m。頂部周辺はやや低めながら切岸を設けており、「本丸」といわれる場所となっている。権現山から南西へ突出した丘陵部は「矢操場」と呼ばれ、権現山から矢操場への尾根筋には浅めの堀切が現認できる。権現山東麓には明徳寺があり、これを城主居館と想定する説もある。種元碑～城内馬場～権現山、矢操場などではまだ城跡に関連する出土遺物等が確認されておらず、真の縄張りはこちらからの調査の中で確定していく必要がある(註2)。

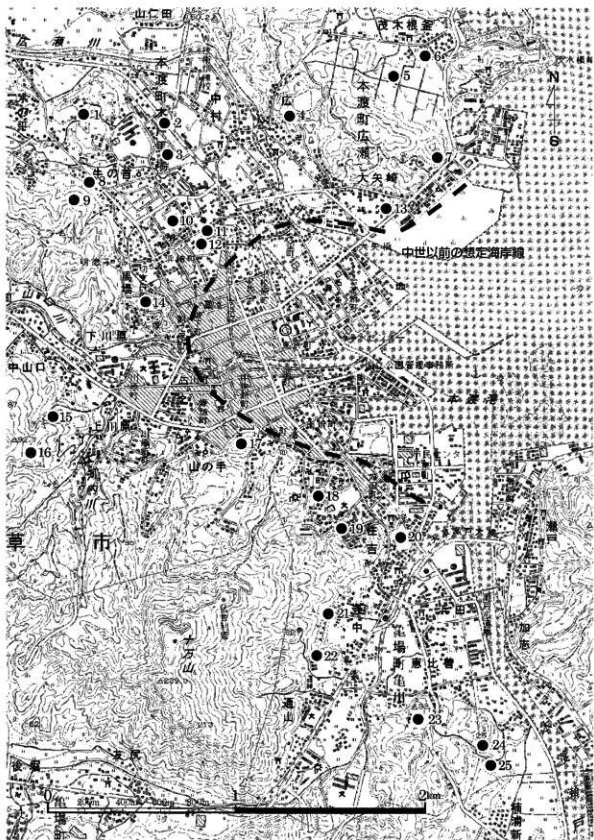
### 第2節 歴史的環境

本渡地域では旧石器時代の遺跡こそ発見されていないものの、縄文時代の遺跡は数多く発見されている。特に前～後期にかかる大矢遺跡は、九州を代表する漁撈・生産遺跡として内外の注目を集めている重要な遺跡である。広瀬川河口左岸に営まれ、その範囲は約1000mに及び、短期間のトレンチ調査のため検出遺構こそ少なかったが、大量の石器・土器が出土し、中には粉の圧痕が残る縄文土器も発見され、縄文時代研究に一石を投じる程の調査成果が得られている。広瀬川右岸から町山口川左岸に挟まれる地域にも縄文遺跡は多くあり、各所でチップや石鏃等が採集される。丸尾遺跡では石器の他に、押型土土器も発見されている。

弥生時代の遺跡は、縄文時代に比べて極めて少なく、その実態は明らかではない。わずかに川原田遺跡や本渡北小学校遺跡、浜崎遺跡などで土器片他弥生時代遺物が発見される程度にとどまっており、明確な遺構が検出されていない。離島という土地柄、稲作に適した沖積平野が少なく、縄文時代の狩猟採集生活が弥生時代に至っても継続していたケースも往々にして想定される。

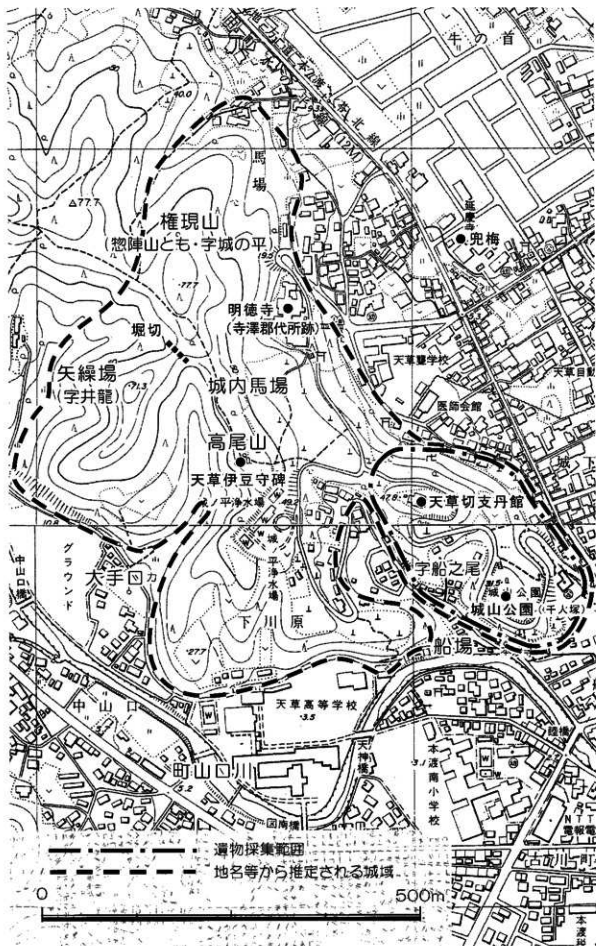
古墳時代に入ると海に面した突出部を中心に古墳が築かれる。その形態は普遍的な横穴式石室を有す





1. 丸尾遺跡
2. 川原田遺跡
3. 牛の首丸尾遺跡
4. 広瀬城跡
5. 野稻箱式石棺
6. 茂木根善坪横穴墓群
7. 大矢崎古墳群
8. 箱の水堀田空跡
9. 箱の水遺跡
10. 浜崎遺跡
11. 本渡北小学校プール遺跡
12. 本渡北小学校遺跡
13. 大矢遺跡
14. 本渡城跡(馬場)
15. 緑山遺跡
16. 大河内遺跡
17. 本渡城跡(中山口)
18. 本渡南遺跡A
19. 本渡南遺跡B
20. 妻の鼻墳墓群
21. 亀川来迎寺跡
22. 亀川中学校遺跡
23. 恵比曾遺跡
24. 障子瀬遺跡
25. 藤の河遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/20000)



第3図 本波城跡周辺地形図 (1/5000)

る円墳以外にも箱式石棺墓、横穴墓群、さらに単人系の墓制とされる地下式板石横石室墓などハロエーションに富む。周辺域では、かつて本渡瀬川を望む亀川の岬に妻の鼻墳墓群が存在していた。地下式板石横石室墓を中心として34基以上の墳墓が群在した集団墓で、5世紀後半～6世紀前半に位置づけられている。残念ながら開発により移転を余儀なくされ、現在は茂木根海岸北の岬に移築復元されている。その茂木根地区の丘陵は阿蘇溶結凝灰岩で形成されており、これを利用した茂木根横穴墓群が残っている。現在残存するのは4基で、出土した須恵器から6世紀後半～7世紀頃のものと判断されている。茂木根横穴墓群から南へ離れた菅坪地区にもかつて横穴墓があり、防空壕として利用された際に小型の須恵器蓋環が致点採集されているが、破壊され現存していない。

古代の遺跡は、天草全域で明確な官衙遺跡が未発見であり、集落等についても不明な点が多いが、わずかに本渡北小学校プール遺跡において平安期の水田跡が検出されている。

中世遺跡としては、本渡城の麓にあたる平野部に所在する浜崎遺跡において、溝状遺構とともに宋代貿易陶磁、滑石製石鍋や中世土師器などの遺物が大量に出土している。浜崎遺跡の出土遺物から見た盛期は13世紀であり、中国産陶磁器のみならず関西系の陶器類等も出土することから広範に亘る交易が行われていたことが示唆される。13世紀前半は本渡(註3)地域の領主は天草種有であることが史料から知られており、大量の陶磁器が出土した浜崎遺跡は一般集落ではなく、地域の有力者すなわち天草氏と深く関わる遺跡である可能性は高い。遺物の状況から14世紀には衰微すると考えられるため、それ以後は交易地が他所に移り変わったと推測される。あるいは天草氏が本渡から河内浦へ拠点を移した時期と符号する可能性もあり、本渡城跡との関連性をより詳細に検討する必要がある遺跡である。

天草における中世城館は、県内各地域と比べても、特に密に所在している。顕著な遺構はなくとも「城山」「城の平」など城に関わる地名が残る丘陵を含めると60以上を数える。第4図には代表的な50の城館遺跡を示したが、有明海沿岸や不知火海沿岸、とりわけ天草上島部分に数多く分布する状況が見て取れる。上島は下島より面積が狭いにも関わらず、中世天草の有力領主「天草五人衆」のうち上津浦・柄本・大矢野の三氏が分割して領有していた。さらに下島の志岐氏や天草氏が島子城を所有していた時期もあり、五人衆全体の日が注がれ、絶えず軍事的に緊張していたようである。城館の密な配置もその歴史背景が多少なりとも現れた結果と考えられる。他方、本渡城から南の下島南部、特に内陸部はかなり城館の配置が手薄となっている。最も広大な領域を有していた天草氏の安定支配がうかがえる。

翻って本渡城は、天草氏と志岐氏の領域境にあり、周辺の城郭配置も敵軍であったと見られる。町山門川をはさんで南に1kmの丘陵端部には同名の本渡城(町山口の本渡城)、広瀬川を挟んで東に2kmの丘陵に広瀬城があったと言われる。無論、両城とも調査は行われておらず、同時代性等が不明ながら、配置から船之尾本渡城との有機的な関連(友軍の衛星的城砦か敵軍の障城等)が想定される。

### 第3節 本渡城跡に関する歴史

本渡の地名が記録上から確認できるようになるのは、貞永二年(1233)志岐文書にある天草種有讓状案が最初である。同時に、既にこの頃天草氏が本渡の地頭職にあり勢力を持っていたことも理解される。この讓状案を始め、室町時代の史料には「本砥」の表記が用いられることが多い。

本渡城周辺域は天草氏と志岐氏の境目として、繰り返し係争の地となったことは想像に難くない。正和二年(1313)、建武四年(1337)に本砥地頭職を志岐へ補任する旨の書状があり、応永六年(1399)には菊池武朝から志岐武遠へ本戸知行を安堵する書状がある(註4)。およそ100年を過ぎた永正二年(1505)にも天草大夫跡の本砥を志岐に渡す旨が知られている。書状の状況から本渡地域の支配権は頻繁に移り変わっていると見て差し支えない。14～15世紀の動乱の中で、本渡城も必要に迫られ築かれたものと推測されるが、城の築城そのものに関する史料は見られない。

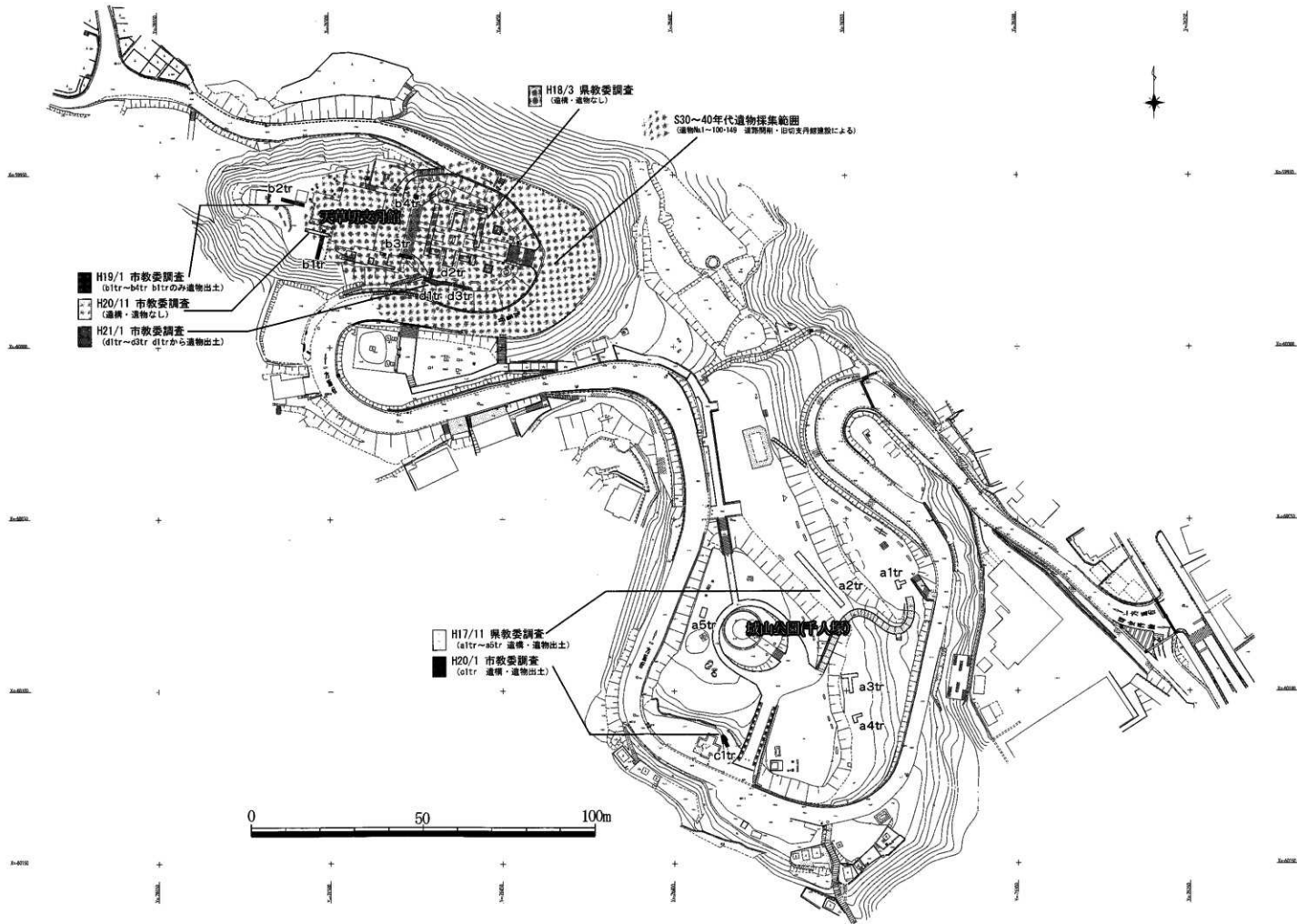
16世紀の天草諸豪(天草一揆中・天草五人衆)の動きは相良氏の八代日記等によって知られる。対外的

には「天草一揆中」として並立する共和的連合体としての扱いを受けていたようだが、島内ではそこから抜き出るため、覇権を競い恒常的に争いを繰り返した。最も実力を持っていた天草氏も領土拡張に積極的で、1560年頃には小島子や下砥岐(御所浦島)まで領していたようである。本渡城は享祿～天文元年頃天草弾正行盛が存城しているというが、これは後太平記等の史料による。同時に、この頃本渡は天草氏が奪回していると理解される。永祿八年(1565年)、八代日記に「栖本・志岐・有馬・出水(出水島津氏)、本砥へ動く」とある。八代日記の通例から「動」は城攻めのことと考えられる。

本渡城の主だった記載は天正十七年(1589)に起きた天正天草合戦の舞台としての記録に大きく依拠す



第4図 天草の中世城館分布図



第5図 本渡城跡地形測量図(1/100)

るのであるが、清正記等国内史料の他にイエズス会日本報告集等の海外史料にも記載されている点は非常に重要であろう。

イエズス会報告における本渡城関連記事は1571年のフランシスコ=カブラルによる書簡(註5)と1590年のルイス=フロイスによる年報に残っている(註6)。天草の領主天草鎮尚に招かれた日本布教長フランシスコ=カブラルと修道士ルイス=デ=アルメイダは最初に本渡城に逗留した。1571年書簡には「彼(天草鎮尚=天草氏当主で河内浦城主)の家臣である一領主に属していること、城は非常に広壮かつ強固、城内と周囲に1万~1万2000人を擁していること」が記されている。

1590年書簡は合戦の様子を克明に叙述する。それはまさにキリシタン殉教の戦いであった。城にかかる記述は「ドン・ジョアン(天草久種=鎮尚実子・天草氏当主で河内浦城主)所有の最も堅固で主要な城の中で第二番目のもの、城主はドン・ジョアンの伯叔父ドン・アンデレ(天草伊豆守種元)、本渡近くの町村に住むキリシタンが全員妻子とともにここに立て籠もったこと、イエズス会員は二名で司祭一人に修道士十一人がおり、城内に教会を持つこと、銃声が教会で告白を聞いているところまで届いてきたこと、城の婦人達300名がコンタツのロザリオを首にかけイエスの御名を唱えながら突撃したこと、ドン・アンデレとその息子が約1300名のキリシタンとともに亡くなったこと、アグスチノ(小西行長)が守備隊としてキリシタン貴人(武将)を多くの兵士とともに留め置いたこと」などが記される。特に婦人による戦いのくだりは続撰清正記の「本渡落城のとき女人働の事」でも知られ、また城下にも「兜梅」という伝説として伝わっている。

国内史料における天正天草合戦の記録は、清正記や九州治乱記などいくつかあるが、いずれも内容は類似しており、本来は一つであると考えられる。それぞれが表現は多少は違えど「城は西南東は険しい難所で、北は山へ続く。(守備勢は)北を大事として防御施設を構え、堀を深くほり、櫓や塀を設けている」と城の守りを表現している。諸記録とも、小異あるが、「北東は加藤清正受け持ち、西は小西行長、南は有馬・大村・平戸・五島の肥前衆が受け持った」「伊豆守は矢倉に上り妻子とともに自害」と記している。立て籠もった天草勢とキリシタンたちはほぼ全滅、城と運命をともにしたが、加藤勢もまた被害が大きく、天草氏の本拠地である河内浦までは攻められなかったようである。

本渡城での合戦は肥後国最後の在地位領主の抵抗であり、またキリシタンの殉教戦でもあった。戦国史上、非常に貴重な歴史背景を持つ地方城郭であり、また近年とみに注目を浴びつつあるキリシタン遺跡としての潜在性も多分に有した重要な遺跡である。

註1 現在は本丸と見る向きもある。

註2 地名や構造等は以下文献の示唆によるところが大きい。

亀井勇「本戸城址考」『天草史談 復刊号(通巻十九号)』1968 天草史談会

鶴田八洲成「本渡城跡の歴史的構造 -天正の天草合戦・四百年記念研究」『天正の天草合戦誌』1989 天草歴史文化遺産の会

註3 原表記は「本砥嶋地頭戦」。「ほんど」については概ね、室町期が本砥、戦国期が本渡、江戸期に入り本戸とする例が多い。

註4 天草の中世文献は残っているものが少なく、特に応仁の乱以前はほぼ志岐文書のみによっている状況であるため、志岐方の記述が中心となる。

註5 松田毅一(監訳)『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第4巻 1998 同朋舎

註6 松田毅一(監訳)『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第一期第1巻 1987 同朋舎

### 第三章 調査の成果

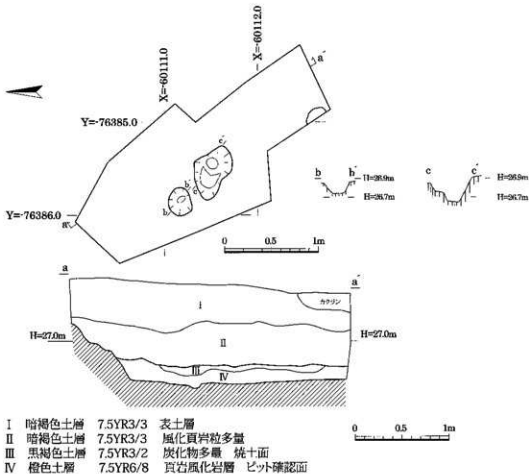
#### 第1節 調査の概要

まちづくり交付金事業にかかる調査は、平成17年度より21年度まで事業の進捗状況にあわせ実施している。本質的には広範囲にわたる地形改変ではないため、個別の施工単位毎に立会調査や確認調査を実施してきた。

まず城山公園の整備に先立って平成17年11月に熊本県教育委員会によって試掘調査が行われた(a1～a5トレンチ)。各トレンチでピット・溝状遺構などが検出され、良好な残存状況であることが確認されている。続き平成18年2月の切支丹館前庭部の試掘調査も熊本県教育委員会によって実施され、前庭部が開発によりかなりの地形改変を被っていることが確認された。

平成18年3月からは天草市教育委員会文化課が調査を担当し、平成19年1月に前庭部を除く天草切支丹館周囲の試掘調査を実施した(b1～b4トレンチ)。b2～b4トレンチは改変を受けていたが、わずかにb1トレンチにおいて包含層と遺構面が検出され、土師器を中心とした遺物が出土したことから、切支丹館南西部のごく限定された範囲については旧地形が残存していることが判明した。これによりまちづくり交付金事業の対象範囲における埋蔵文化財残存状況が概ね把握されたため、事業に関係する各課と協議を重ね、埋蔵文化財に配慮した事業実施に理解を求めてきた。

この後、整備にかかる工事の施工に際しては、概ね担当者による立会調査を実施してきたが、明確な遺構が検出されたケースは少なかった。しかしc区・d区において埋蔵文化財が確認され、記録保存を



第6図 c1トレンチ平面図・断面図(1/40)

実施して対応した。

本節では、ある程度まとまって遺物が確認されたc区(城山公園南側トイレ付近)、d区(切支丹館前庭南端部)のトレンチ調査概要を報告する。

### c 区 の 調 査 (第 6 図、図 版 1・2)

平成 20 年 1 月に実施された城山公園トイレ背後のよう壁付け替え工事の立会中に埋蔵文化財の残存が確認された。周辺はほとんど掘り返されており、残存面積は 3㎡ 強に過ぎず、極めて狭い範囲での調査となった。狭小な範囲の割に少なくない遺物が出土し、戦火で焼けたと思われる焼上面とその下層に岩盤掘込のピットを確認できた。

近世遺物が混在した包含層であるⅢ層を除去したところで、饅頭心の青花E群碗(114)や備前焼壺片(119)等とともに炭化物が広がる層(Ⅲ層)を検出した。出土遺物から 16 世紀中～後半頃の焼土面と推定される。Ⅲ層検出面では炭化した柱材の一部が出土したが、同面ではピット等の遺構は検出されなかった。掘削後、岩盤まで達した段階で岩盤に掘り込んだピット 3 基を検出している。岩盤面はフラットに整地されており、曲輪造成のために岩盤加工を実施していたことが判明した。

### d 区 の 調 査 (第 7・8 図、図 版 2・3)

平成 21 年 3 月の天草切支丹館前庭部工事の際に、土師器坏が出土した。前庭部はそのほとんどがクランとなっていたが、南側曲輪端の一部のみ造成を免れ遺構が残存していたようである。

急遽、残存範囲確認と記録保存のために、段落ち際に東西方向へ d1～d3 までのトレンチを設定して掘削を行った。結果、d2・d3 トレンチは完全に造成されており遺構は残存していなかったものの、d1 トレンチにおいて表土下約 15cm で土師器がまとめて出土した。出土状況を記録し遺物を取り上げ、さらに掘削を行ったが、遺構は検出されなかった。狭い範囲とはいえ、土師器類以外の共存遺物がない点は示唆的である。西へ約 30m 隔たった b1 トレンチにおいても土師器の出土比率が極めて高かったことから、天草切支丹館周辺は本波城の中でも儀礼・饗宴などを司った空間であったと考えられる。

## 第 2 節 採集遺物・出土遺物について

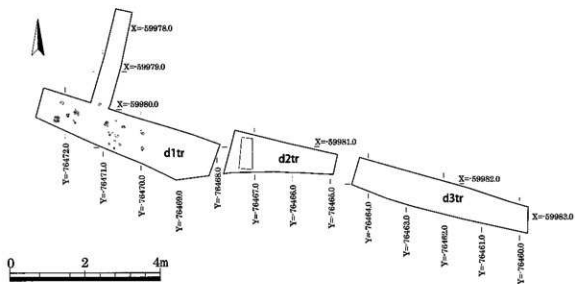
### 昭和 30～40 年代採集遺物(第 9～13 図、図 版 3～13・16)

1～100 及び 149 は昭和 30～40 年代に採集された遺物である。採集地は概ね天草切支丹館が立地していた曲輪の周辺一帯(第 5 図網掛け範囲)とされる。

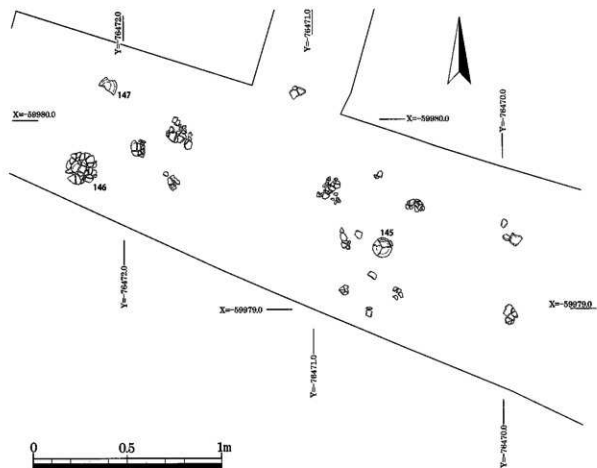
1～41 は土師器皿である。全て底部は糸切り離し。1～4 は口縁端部を丸く仕上げるタイプの小皿である。内外面とも強い回転ナデを施す。1・3 は小型。口径は各々 5.9cm。器高は 1.6 及び 1.7cm。見込はボタン状に盛り上がる。2・4 は口径が各々 6.9cm と 7.5cm。器高は 2.2、2.1cm。見込に溝状の工具痕。5 は口径と底径の差が少ない器形。6～39 は口縁内面にヘラ削りを施し、口縁端部を薄く作るタイプ。最もポピュラーな器形で、見込のヘソは蛇の目状に中央が凹み、周囲が盛り上がる。糸切り後、体部の立ち上がりは面取りされ丸く仕上げられる。24 は口唇部に油煙が付着しており灯明皿である。6～39 の法量の平均値は口径 8.3cm、底径 5.5cm、器高 2.1cm。40 は口径 7.0cm で小型。体部は途中から垂直に立ち上がり、口縁内面側にヘラ削り。

42～84 は土師器坏。42 はやや厚手で体部上半が直線的に立ち上がる。43～45 は橙色の強い焼き上がり呈し、43 は体部全体、44・45 は体部下半に回転ヘラ削りによる明瞭な段。48・49 は体部が直線的に立ち上がる。46・47・50～82 は口縁端部をつまみ上げ薄く仕上げるタイプ。体部立ち上がり部をヘラで面取りし丸く仕上げ、やや外反する体部は口縁で直線状となり段を呈す。見込は蛇の目状に盛り上がる。63・77 は体部がやや内弯気味で、口縁は外反しない。65 は器高が低く立ち上がり部の面取りがない。46・47・50～82 の口径は最大で 13.0cm、最小 10.2cm、平均値は 11.7cm。器高は最高 3.6cm、最低 2.2cm、平均値は 2.98cm である。84 は口縁部を強く外反させ、端部を丸く仕上げる。

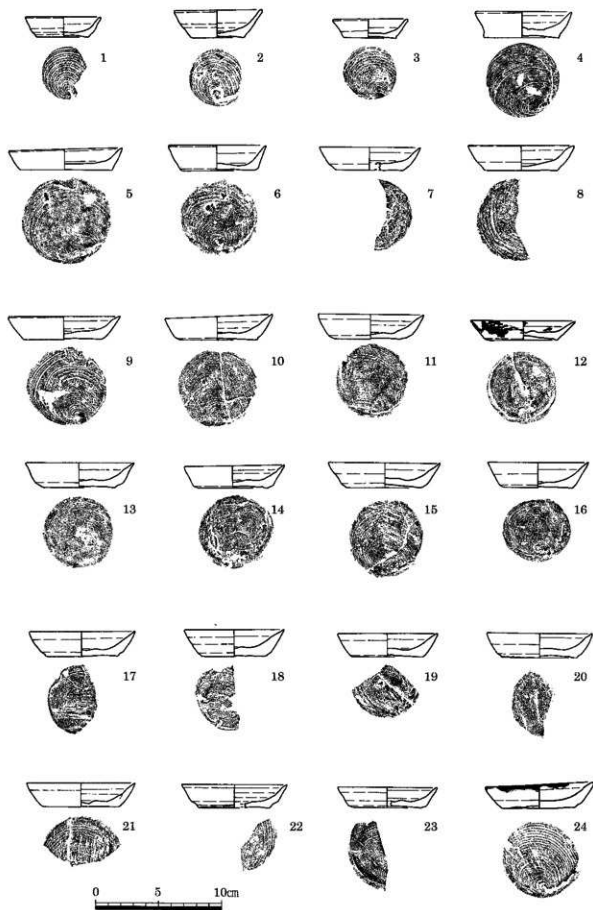




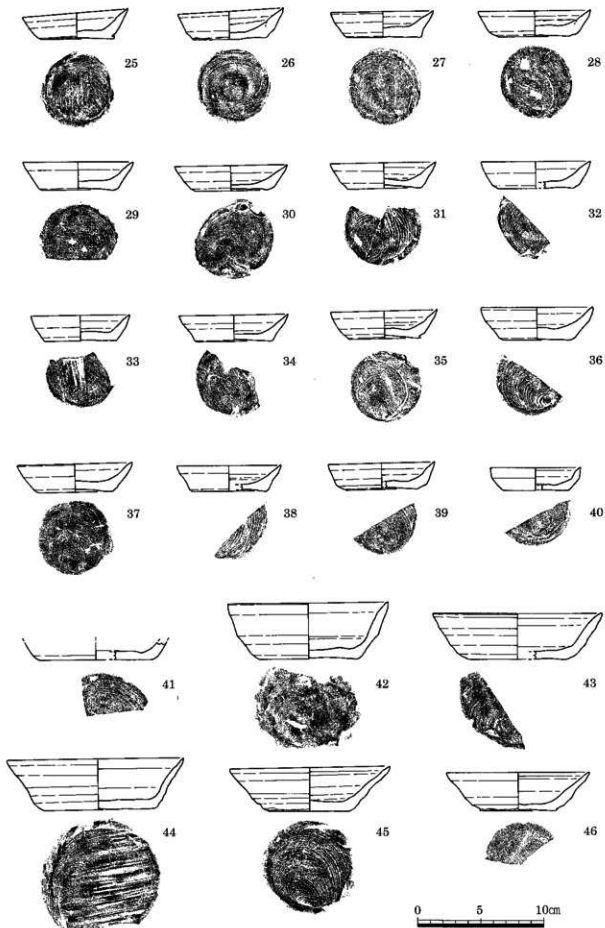
第7図 d1～d3トレンチ平面図 (1/100)



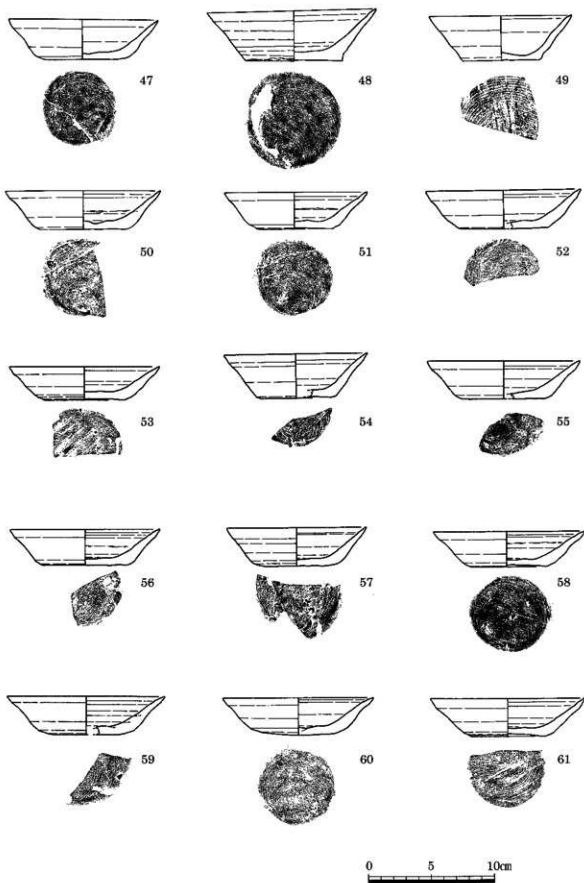
第8図 d1トレンチ土器出土状況平面図 (1/20)



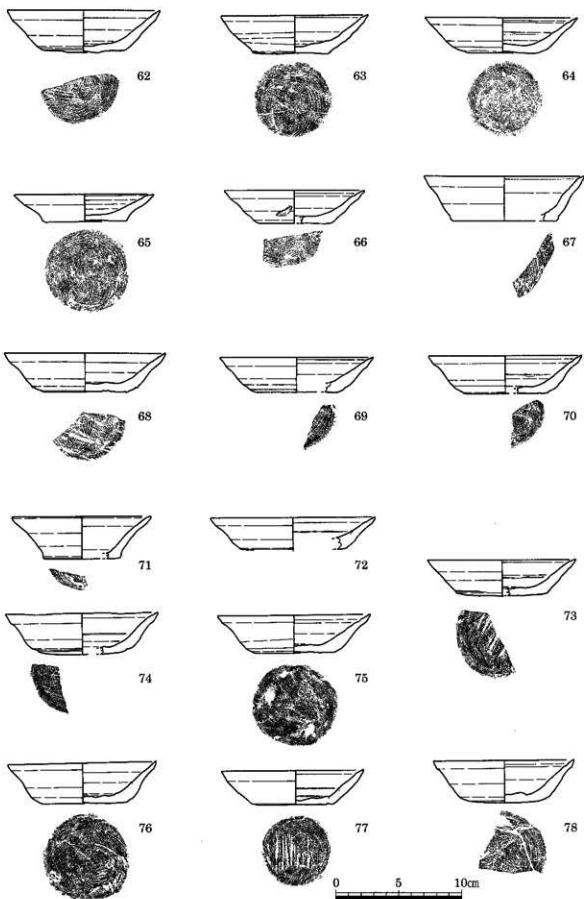
第9圖 昭和30~40年代採集遺物実測圖 I (1/3)



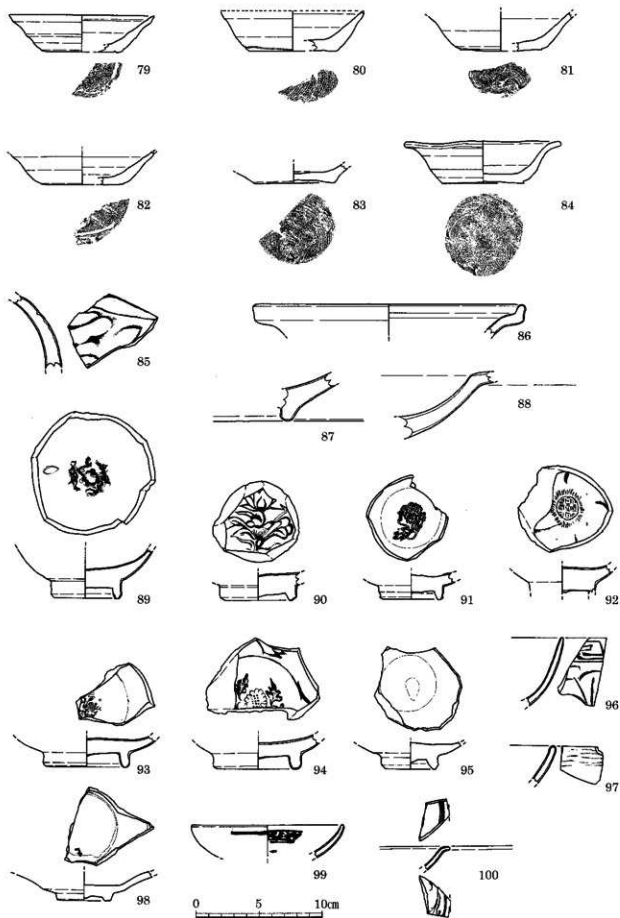
第10図 昭和30~40年代採集遺物実測図Ⅱ(1/3)



第 11 圖 昭和 30 ~ 40 年代採集遺物実測図 Ⅲ (1/3)



第 12 図 昭和 30 ~ 40 年代採集遺物実測図 IV (1/3)



第13圖 昭和30~40年代採集遺物実測圖 V (1/3)

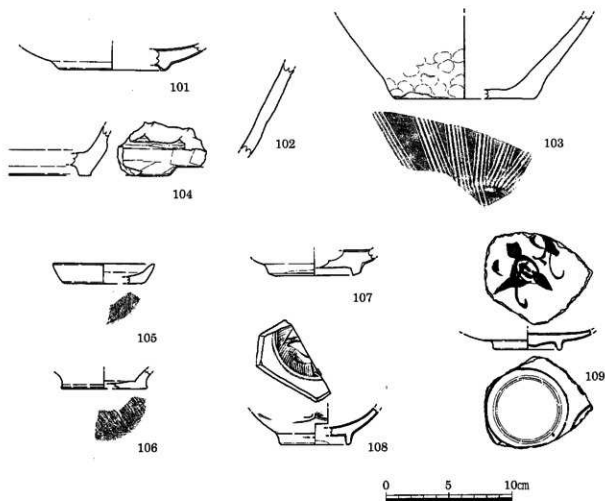
85-98は青磁。97を除き龍泉窯系。85は酒海壺肩部の破片。片切り彫りで文様を刻む。86は青磁盤。口縁は直立。87は盤の底部か。88は盤の体部。内弯する器形で文様は見られない。89-97は碗。89は外底露胎、高台内側の途中まで軸がかかる。90は坏の可能性もある。畳付は斜めに削られ、外底と畳付の比高差が少なく低めの高台。高台の軸はムラがけ。見込は花文のスタンプ。13世紀代か。91は碗底部。焼成不良。外底から高台内側まで露胎。見込も円形にかきとられ露胎だが、植物のスタンプ痕跡も有す。92は碗底部で高台欠損。外底は蛇の目釉剥ぎ。見込は円内格子のスタンプに、片切り彫りの文様。93、94も碗底部で、外底蛇の目釉剥ぎ、見込花文スタンプ。15世紀前半以降か。95は高台径の小さな碗底部。畳付は高台外側へ外傾する。畳付から外底にかけて露胎。見込も円形露胎。96は雷文碗。口縁付近にやや崩れた雷文、体部に蓮弁文。14世紀後半-15世紀。97は波状に略化した雷文を持つ口縁。16世紀頃。98は腰折れ皿。口縁が輪花になるタイプか。外底露胎で畳付の軸も雑に拭き取る。見込は円形露胎。15世紀。

99・100は青花。99は内弯する皿の口縁部。小野E群で漳州窯系か。100は端反皿の口縁部。小野B1群。外面に唐草文。景德鎮窯系。16世紀。

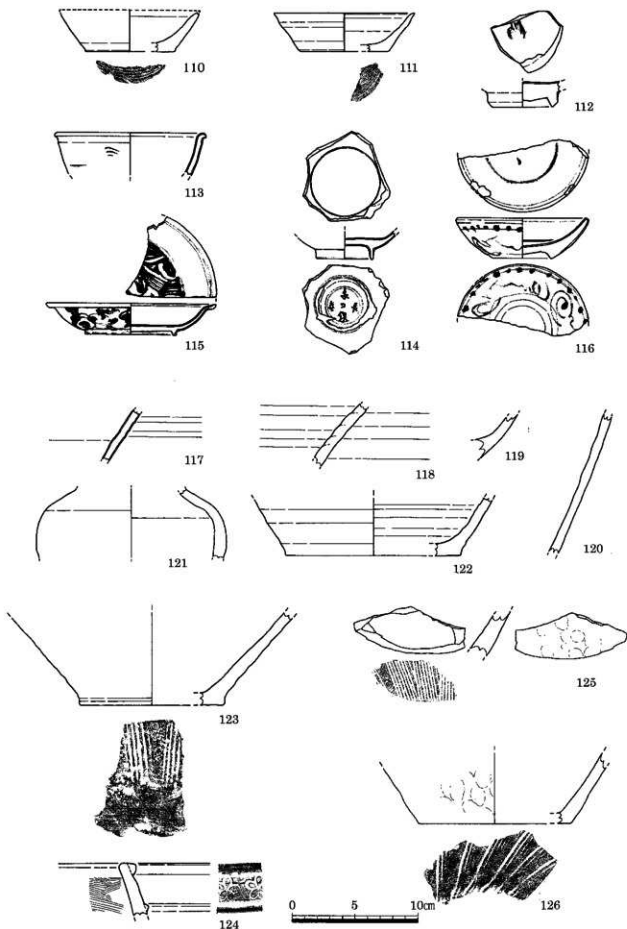
149は石製印鑑。篆書体で「常秀之印」と刻む。判面は一辺2.9cm四方。全高3.5cmで鈕部は欠損。石材はろう石とも呼ばれるタルク。石材は中国からの舶載の可能性も考えられる。

#### b1 トレンチ出土遺物 (第14図、図版13)

101は青磁盤底部。高台断面は楕円形となる。龍泉窯系。102は備前甕の胴部片。103は中世須恵



第14図 b1 トレンチ出土遺物・平成13年度採集遺物実測図(1/3)



第15図 c1トレンチ出土遺物実測図(1/3)

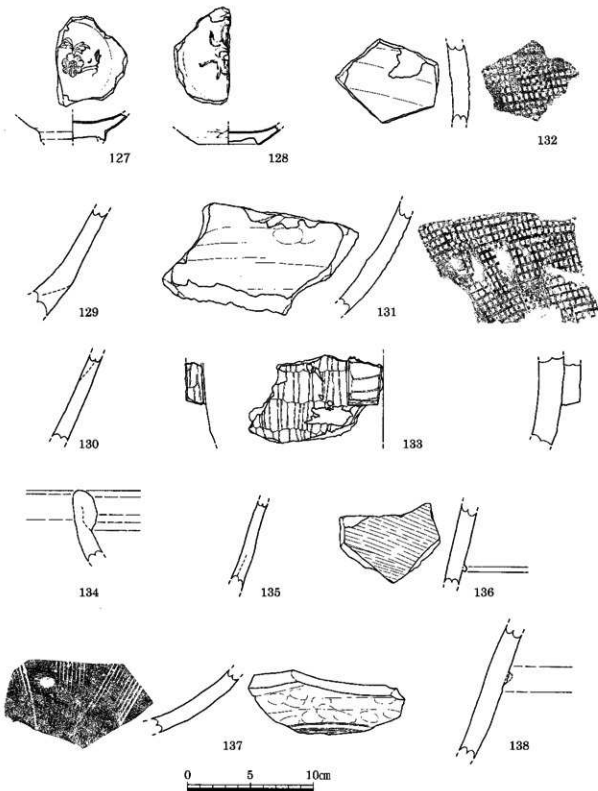


器の摺鉢。摺り目は六条。体部には指おさえの痕跡。104は瓦質火舎の脚部。

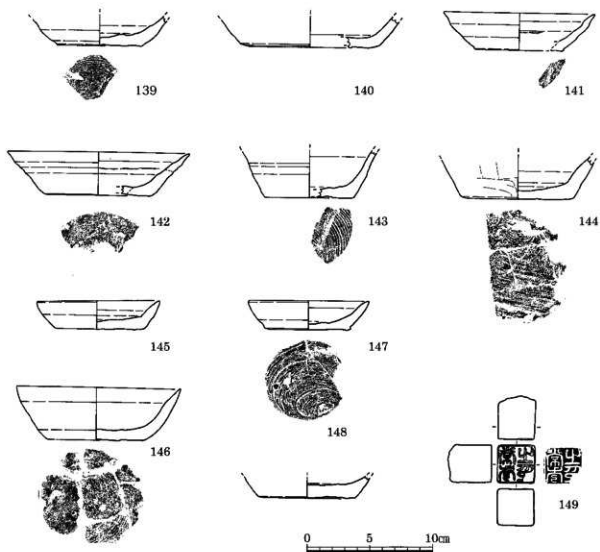
平成 13 年採集遺物 (第 14 図、図版 13)

105～109は平成 13 年に採集された遺物である。

105・106は土師器皿。106は器高が 1.6cm と低く、体部はやや内弯する。107は青磁碗底部。壺付から外底にかけて露胎。高台断面は方形で壺付はカットされ外傾する。108は青花碗で小野 C 群。見込



第 16 図 平成 20 年採集遺物実測図 (1/3)



第17図 d1トレンチ出土遺物・石製印鑑実測圖 (1/3)

に蓮花文様。外面はアラベスク文。疊付は軸剥ぎされ、若干砂粒が融着する。15世紀後半～16世紀。109は粗製の青花皿。見込はダミ筆を使った筆致で雑に草花を描く。高台は全面に施釉し疊付のみ丁寧に軸剥ぎ。高台は小さく低く、周囲に圈線。福建省産と思われる。二次被熱により器面は気泡が浮かびブツブツとなっている。16世紀後半～17世紀初頭頃のものか。

#### c1トレンチ出土遺物 (第15図、図版13・14)

110・111は土師器杯。いずれも体部は直線的に作り、立ち上がり部の糸切り後面取りはない。112は青磁碗底部。底部は肥厚。疊付外傾タイプで、疊付から外底は露胎だが、外底の2箇所に円形の鉄釉が付着。2点支持の窯詰め法であろう。113は福建系の白磁碗。口縁は外反し、付近に波状文様。貫入が数多く入る。16世紀後半。114は饅頭心の青花碗。小野E群。細高の高台で、外底に「永保長春」の吉祥句。見込は盛り上がり、文様は圈線のみ。16世紀後半。115は青花端反皿で小野B2群。薄作りで外面に唐草文、見込には樓閣人物文を描く。高台は細く低く、疊付に砂粒付着。16世紀中頃～後半。116は漳州窯系の青花萼筒底皿。口縁付近に二条の圈線があり、下の線に沿って列点を施す。体部は

雑な筆致で渦状の文様を描く。唐草文か。釉は貫入が多く、ムラが多い。117は黒釉陶器。壺か。中国産。119、120は備前焼。123は瓦質播鉢。125、126は須恵質播鉢。124は瓦質火舎。口縁に五花弁のスタンプ。

#### 平成20年採集遺物（第16図、図版15）

127～138は平成20年に工事立会や踏査において調査担当者が採集した遺物である。

127は青磁碗底部。高台欠損で外底露胎。見込は花文スタンプ。128は津州窯系の青花菴筒底皿。小野C群。見込には吉祥字を意匠化した文様。16世紀中頃。129・134は備前焼破片。129は甕の底部付近の破片。かなり肥厚する。134は折り返しの口縁部。130・135は常滑焼破片。外面は横ナア。131・132は中世須恵器の寛片。いずれも外面は格子タタキ、内面はナア調整。133は滑石製石鍋。瘤状把手と体部の破片。11世紀後半～12世紀の西彼杵半高産で、本渡城跡において見られる遺物中、最も古い遺物。136は瓦質火舎。138は須恵質の火舎。青灰色。137は瓦質播鉢。色調は浅黄褐色。

#### d1トレンチ出土遺物（第17図、図版16）

139～148はd1トレンチで出土した土師器。139～144・146・148が坏。139は直線的に立ち上がり器高が高い坏。141・142は口縁をつまみ上げ薄く仕上げるタイプ。体部は浅く開く。144は厚手で焼きが粗い。146は内弯気味に立ち上がる。口縁は薄く仕上げる。145・147は皿。145は底径が広めのタイプ。全体的に摩滅。147はやや内弯気味だが口縁端部は薄い。

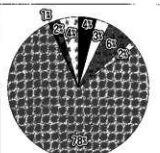
#### 出土遺物の組成について（第2表・第18図）

これまでの表採や調査によって出土した遺物は総計で約600点にのぼる。その内訳は第2表に掲載した。全体数の中で採集資料が相応の比率となる。そのため、この内容が本渡城元来の遺物組成の実勢は反映してないと考えられ、本質的な遺物組成は発掘調査というフィルターを通さねば正確な数値ははじき出せないが、本書ではひとまず参照資料として提示しておく。実質はさらに土師器皿・坏が占める割合が高いと思われる。調査によって出土したb1・c1・d1トレンチの遺物組成もそれぞれ調査範囲が極めて狭いため、数値は局所的な反映であり、全体像の復元には至らないデータである。しかし同じ天草切支丹館周囲であるb1・c1トレンチでは合算して比率を計上したところ、土師器が97.5%を占めるに至った。出土遺物のほとんどが土師器であることから、天草切支丹館が建築されていた周辺には、ハレの空間が設けられていた可能性は極めて高い。本渡城は天草氏の一族、天草伊豆守が在城した城であるが、同様に天草五人衆の一族衆が在城していたことが判明している国史跡の棚底城跡では、このようにほぼ土師器しか出土しない空間というのは調査において見られていない。土師器を利用した武家儀礼の重要視に対し、天草五人衆の中で大きな差異があったのかもしれない。

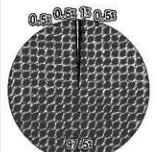
種別	出土箇所		調査年度										種別別 破片数	参考 破片数 出土遺物 数計表		
	1. 530~40年 代探集遺物	2. H12 探集遺物	3. H17 城山公園 a1~a5tr (南高土)	4. H18 切支丹館南 西 b1tr	5. H20 城山公園 北 c1tr	6. H20 探集資料	7. H21 切支丹館南 敷付遺 d1tr	8. H21 探集資料	9. H21 探集資料	10. H21 探集資料	11. H21 探集資料	12. H21 探集資料				
青磁	無文・不明	0	0	1	1	0	3	0	5						406	
	B I (磁器中)	0	0	0	0	0	0	0	0						3	
	B II (磁器外)	1	0	0	0	0	0	0	1						7	
	B III (非遺存体分類)	0	0	0	0	0	0	0	0						18	
	B IV (磁器編年)	0	0	0	0	0	1	0	1						50	
	C I (密文物)	1	0	0	0	0	0	0	1						15	
	C II (密文物)	1	0	0	0	0	0	0	1						3	
	D (磁灰)	1	0	0	0	0	0	2	0						46	
	高台 I (遺存体分類)	1	1	0	0	1	0	0	3						8	
	高台 II (遺存体分類)	2	0	0	0	0	0	0	2						5	
	高台 III (遺存体分類)	3	0	0	0	0	0	0	3						1	
	接花皿	1	0	0	0	0	0	0	1						20	
	型打菊皿 (青磁類)	0	0	1	0	0	0	0	1						8	
	膳 (大皿)	3	0	0	1	0	0	0	4						9	
	香炉	0	0	0	0	0	0	0	0						2	
他	1	0	0	0	0	0	0	1						8		
合計	15	1	2	2	1	6	0	27						609		
白磁	E 磁皿 (磁器類)	4	0	0	0	0	12	0	16						104	
	型打菊皿	2	0	0	0	0	1	0	3					4		
	その他白磁	0	0	0	0	1	0	0	1					4		
	合計	6	0	0	0	1	13	0	19						114	
	合計	21	1	2	2	2	19	0	46						723	
青花	B 碗	0	0	0	0	0	0	0	0						8	
	C 碗	0	0	1	0	0	2	0	3						110	
	D 碗	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	E 碗	0	0	1	0	1	2	0	4						19	
	F 碗	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	B1 皿	2	0	1	0	0	1	0	4						33	
	B2 皿	0	0	0	0	1	0	0	1						9	
	C 皿	1	0	0	0	0	3	0	4						33	
	C 皿 箱装	0	0	0	0	1	1	0	2						11	
	E 皿	1	0	0	0	0	3	0	4						0	
	F 皿	1	0	0	0	0	1	0	2						1	
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	不明 (物質成分不明)	5	2	0	0	2	0	0	9						100	
	箱装産物	3	1	0	0	0	2	0	6						?	
	合計	13	3	3	0	5	15	0	39						327	
他質異 陶磁類	天目	0	0	0	0	0	0	0	0						10	
	茶入	0	0	0	0	0	0	0	0						2	
	青釉小皿	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	色絵皿	0	0	0	0	0	1	0	1						8	
	ベトナム青花	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	青白磁舍利	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	経路陶器	0	0	0	0	0	0	0	0						2	
	中国産胎輪陶器	0	0	1	1	0	1	0	3						59	
	中国産黒胎輪陶器	0	0	1	0	2	0	0	3						0	
	その他	1	0	0	0	2	0	0	3						6	
	合計	1	0	2	1	4	2	0	10						90	
	土師器	土師器 塚・坪	135	22	7	210	8	28	70	480						367
		土	0	0	0	0	0	0	0	0						4
		合計	135	22	7	210	8	28	70	480						371
		備前	2	0	0	1	2	2	0	7						63
常陸		0	0	0	0	1	2	0	3						18	
焼締 陶器	灰色自然焼陶器	0	0	0	0	0	0	0	0						24	
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0						8	
	合計	2	0	0	1	3	4	0	10						105	
	須恵器質雲 (母子形)	0	0	0	2	2	2	0	4						46	
	須恵器質すり鉢	0	1	0	0	1	0	0	2						39	
中世 須恵器 (須恵器)	須恵器質火舎	1	0	0	0	0	1	0	2						14	
	須恵器質不明・その他	1	0	0	0	0	0	0	5						38	
	合計	2	1	0	0	1	3	0	13						137	
	すり鉢	1	1	0	0	4	1	0	7						72	
	火舎	1	0	0	1	1	1	0	4						59	
瓦質土 器	備付産	0	0	0	0	0	0	0	0						8	
	不明・その他	1	1	1	0	4	0	0	7						139	
	合計	3	2	1	1	9	2	0	18						278	
	白磁別点数	177	29	15	215	38	73	70	616						2031	

※土師器の点数カウントは、口縁部か底部を持つ破片のみ

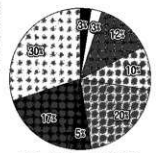
第2表 本渡城跡出土遺物点数表



本渡城跡出土・表探遺物全体  
(分母616片)

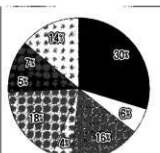


天草切支丹館周辺調査  
(b1トレンチ+d1トレンチ出土分  
分母285片)



城山公園トイレ横調査  
(c1トレンチ出土分 分母40片)

■ 青磁  
□ 白磁  
■ 焼締陶器 (備前等)  
■ 青花  
■ 中世須恵器 (近畿産)  
▷ 他質異陶磁類 \* 瓦質土器



※参考  
棚底城跡出土遺物  
(分母2031片)

第18図 本渡城跡出土  
遺物組成グラフ



遺物番号	遺物番号	種類	形状	寸法	重量	出所	内	外	土	内	備考
53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53
54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54
55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55
56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56
57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57
58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58
59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61
62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62
63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63
64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64
65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65
66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66
67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67
68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68
69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69
70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71
72	72	72	72	72	72	72	72	72	72	72	72
73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73
74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74
75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76
77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77
78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78	78
79	79	79	79	79	79	79	79	79	79	79	79
80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80
81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81
82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82
83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83
84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84
85	85	85	85	85	85	85	85	85	85	85	85

第4表 出土遺物観察表II



## 第IV章 まとめ

### 縄張り(城域)の確定と地区別の性格理解に向けて

今回報告した内容は、天草切支丹館～城山公園における極めて限定的な調査内容である。天草切支丹館周辺は昭和43年の建設時に相当な地形改変が行われたため、遺構の面的な広がりはすでに無く、また遺構がよく残存することが確認された城山公園については、掘削を原則として実施せずに、公園整備のための造成を保護盛土で行ったために局所的調査となった。

調査を実施したトレンチは非常に範囲が狭いことから、断片的な情報しか得ることができなかったが、城山公園付近のc1トレンチで16世紀中～後半頃と思われる焼土面を検出、天草切支丹館周囲のb1・d1トレンチで少なくとも量の土師器出土という成果が得られた。特に天草切支丹館周辺は、採集遺物の質量と総合して考えれば、主郭といえるだけの内容を持っている。

事業範囲となった天草切支丹館～城山公園周辺は本渡地域を代表する観光空間として11米よりかなり開発が進んでおり、往時の城郭地形を把握することが困難になっている。しかしながら、その背後の高所にあたる伊豆守碑～権現山～矢線場等は、開闢・植林の名残はあるものの、概ね今もよく地形を残している。史料上の取容人員から本渡城はかなり広大な縄張りを有していたと考えられ、本渡城跡の史跡としての価値を論じるには、これら地域をどう縄張りに位置づけるかの調査が必要である。

これまでの調査ではキリシタンに関する遺構や遺物は発見されておらず、今次調査でも確認されなかったが、本渡城跡の歴史から見て何かしらの痕跡が見つかる可能性は少なからずある。

### 採集・出土した遺物について

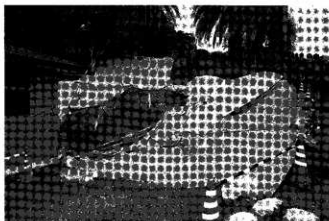
本書で報告した青磁酒海壺(第13図85)は、当時における領主権威の象徴として各地域の主要城館で出土するものである。天草切支丹館があった丘陵部は、本渡城におけるバイタルパートであった可能性は高いが、過去の削平によりその実像の復元が困難となったことは甚だ残念である。

これだけの完形に近い土師器が発見されていることは驚きに値する。天草の中世城館では、基本的に舶載品である陶磁器が多く、地場産の土師器が非常に低調な出土にとどまる傾向が強い。それだけにプロポジションが把握できる土師器は、良好な土器資料である。今後の調査の中で層位的な出土が把握できれば、地域の土器編年に大いに役立つものと思われる。開発主導という厳しい時勢の中で失われていく本渡城の一部を後世に残し伝えた鶴田氏をはじめとする先学の努力に敬意を表したい。

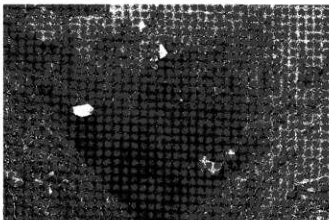
出土遺物の組成は、手付かずの西北部等今後の調査で変動するものと思われるが、土師器優勢の状況はまず間違いない傾向として捉えられよう。これは全国的な視点で見れば、領主クラスの城館に通用の事象であるが、海に面し貿易陶磁器の出土量が土師器に優越する城館もある天草では、却って希有な例である。また、さほど多くない陶磁器類に一定の割合で盤などの威儀財が見られる点も、中央の武家文化に通じるものがある。この傾向が本渡城のみに表象されるものか、あるいは天草五人衆の拠点城郭に通用のものか、さらには天草氏独自の傾向なのかについて、調査を重ねる中で検討することも重要であろう。



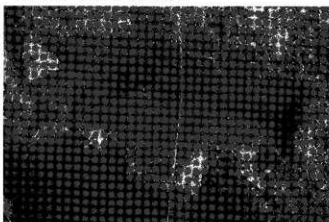
写 真 图 版



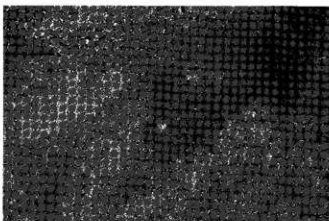
c1 トレンチ全景



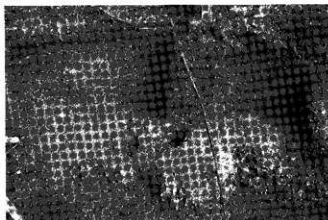
c1 トレンチ 焼土面遺物出土状況



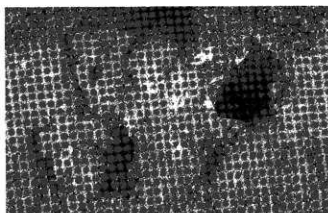
c1 トレンチ 焼土面検出状況



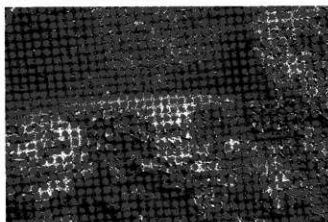
c1 トレンチ 炭化材検出状況



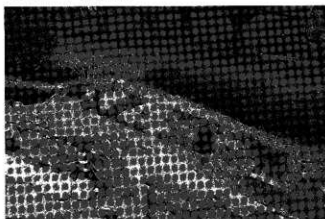
c1トレンチ 完掘状況(岩盤面)



c1トレンチ ビット完掘状況

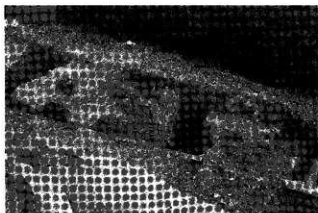


c1トレンチ 土層状況



d1トレンチ全景(北から)

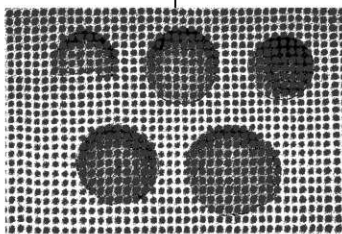
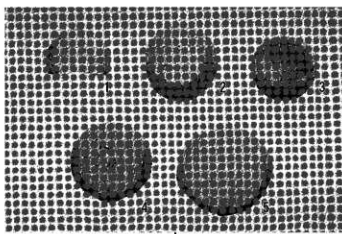
図版2 c1トレンチ・d1トレンチ調査写真



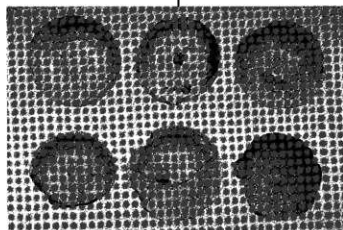
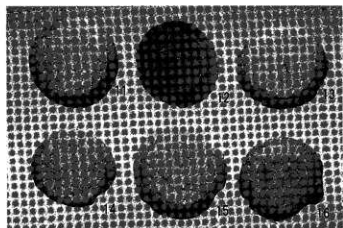
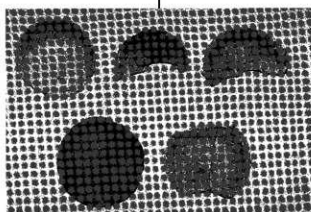
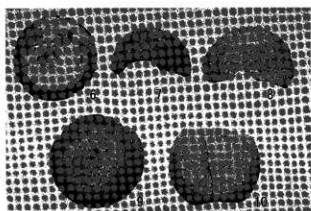
d1 トレンチ 土師器出土状況



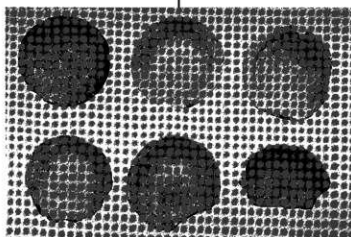
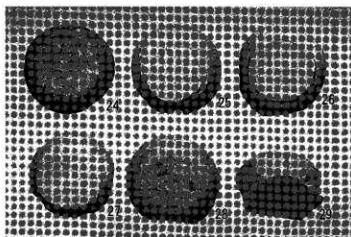
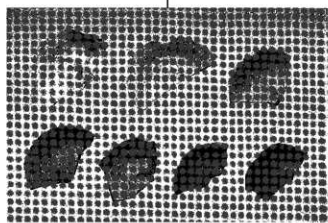
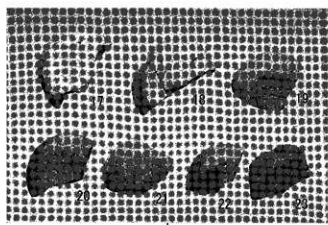
d1 トレンチ 土師器出土状況2



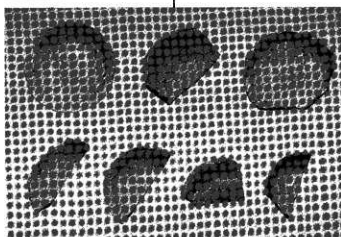
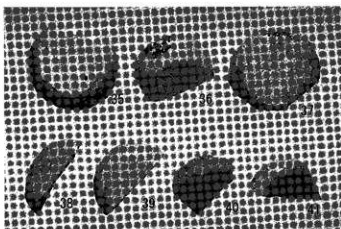
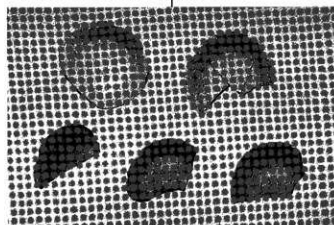
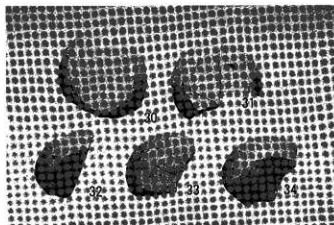
図版3 d1 トレンチ調査写真、表採・出土遺物写真1



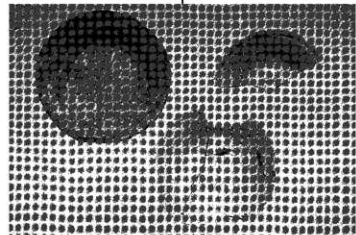
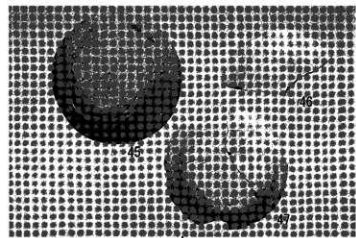
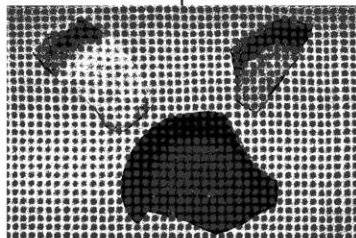
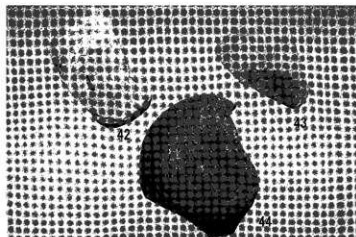
图版4 表探·出土遺物写真2



图版5 表採・出土遺物写真3

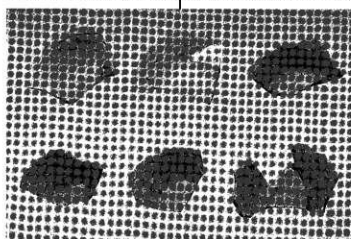
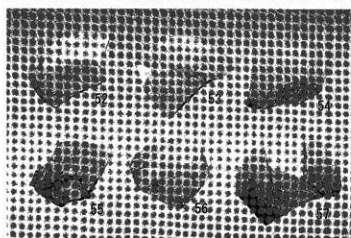
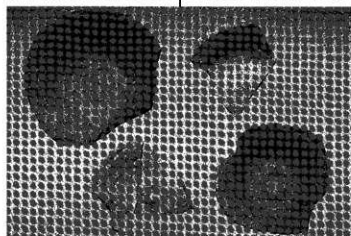
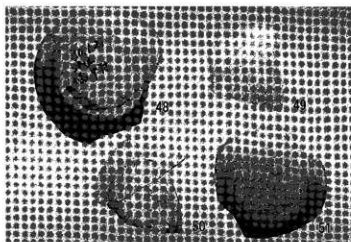


図版6 表採・出土遺物写真4

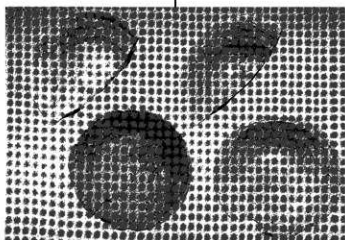
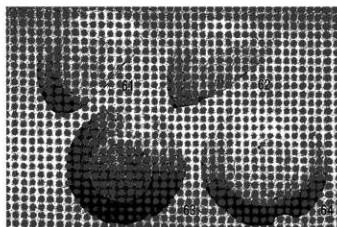
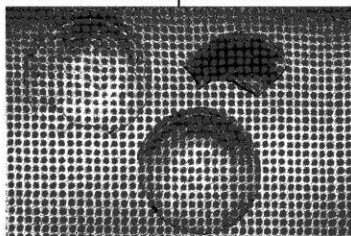
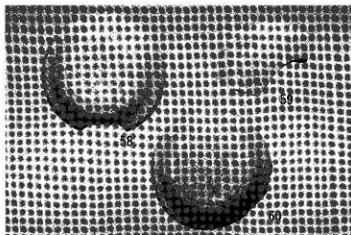


図版7 表採・出土遺物写真5

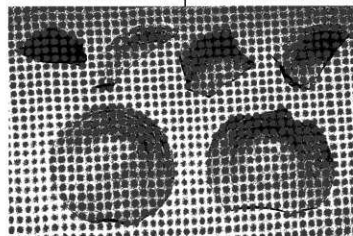
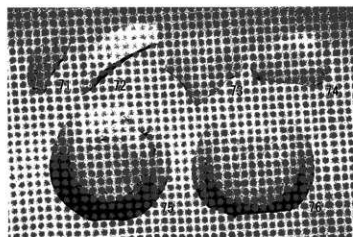
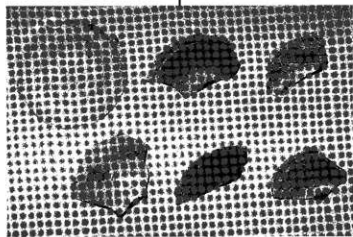
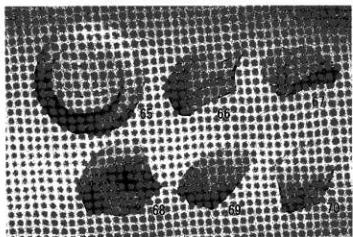




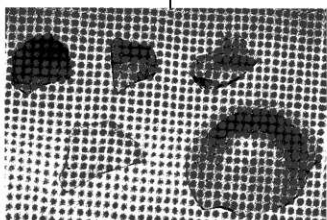
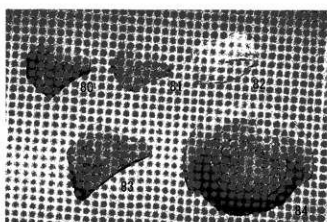
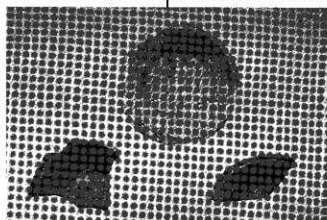
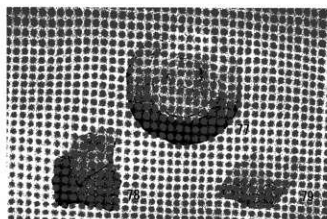
図版8 表採・出土遺物写真6



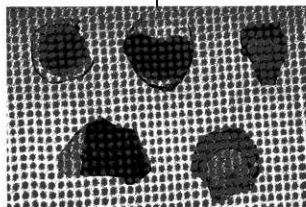
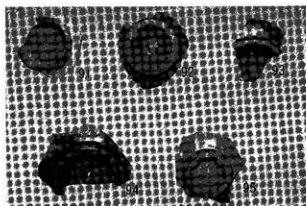
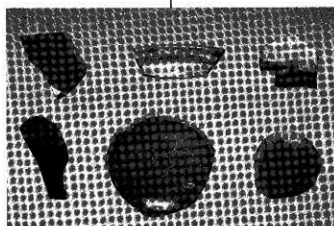
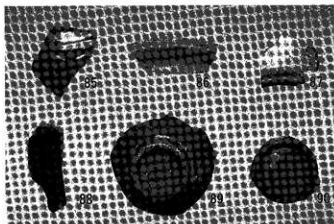
图版9 表採・出土遺物写真7



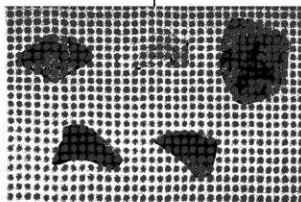
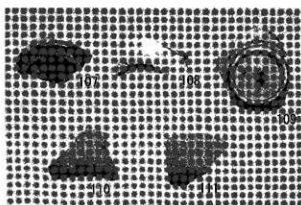
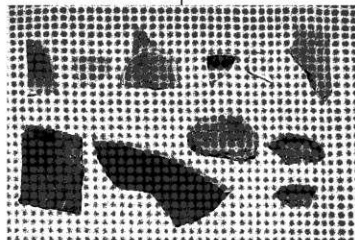
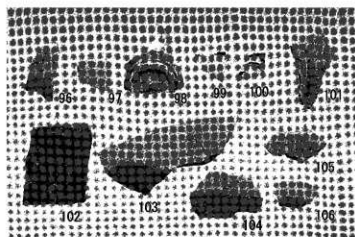
図版10 表採・出土遺物写真8



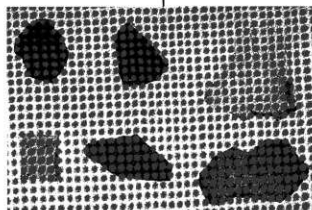
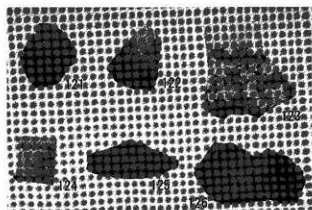
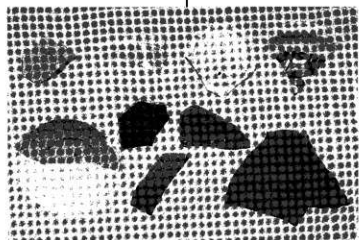
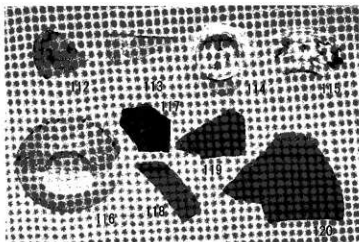
図版11 表採・出土遺物写真9



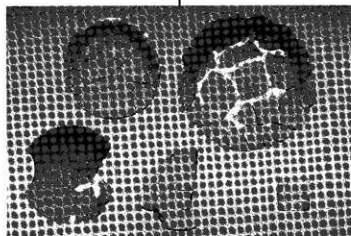
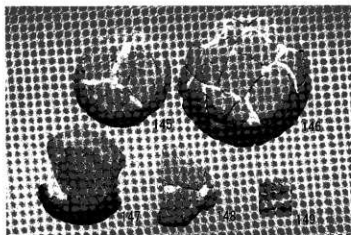
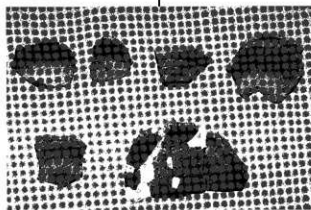
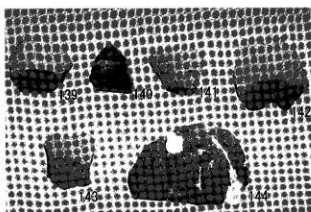
图版12 表採・出土遺物写真10



图版13 表採・出土遺物写真11

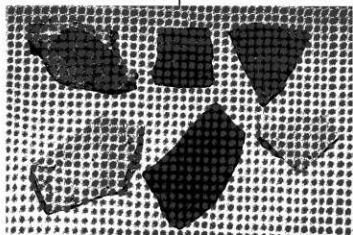
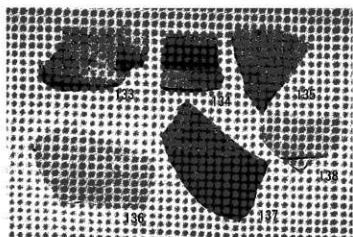
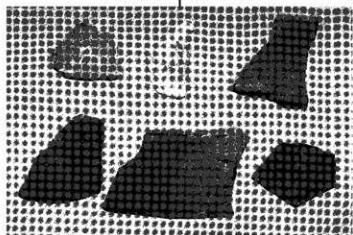
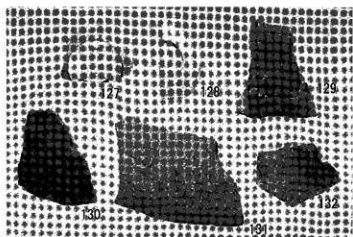


圖版14 表採・出土遺物写真12



图版16 表採・出土遺物写真14





図版15 表採・出土遺物写真13

## 報告書抄録

ふりがな	ほんとしゅうあと							
書名	本渡城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	天草市文化財調査報告書							
シリーズ号	第3集							
編者名	編者 中山 圭							
編集機関	天草市教育委員会							
所在地	〒863-0048 熊本県天草市中村町10番8-1号							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
本渡城跡	熊本県 天草市 船之尾町	43215		32度 27分 36秒	130度 11分 3秒	2005.11.30 ～ 2009.3.17		天草切支丹 館整備  城山公園整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本渡城跡	中世城館	室町時代 ～ 戦国時代	焼土面  岩盤掘込ピット	土師器皿・坏・貿易陶磁 (青磁・白磁・青花・施釉 陶器)・瓦質土器・中世須 恵器・石製印鑑等	
要約	<p>本渡城跡は天草下島の代表的中世城館である。天正十七年(1589)天草伊豆守種元と小西行長・加藤清正の連合軍が戦った天正天草合戦の舞台となり、同年落城。天草地方で最大級の規模を誇り、城内にはキリスト教会が存在、合戦時には周辺のキリシタンも城内に立て籠もったと伝えられるなど天草の中世キリシタン史を理解する上でも重要な遺跡である。調査は小規模のトレンチ調査であるが、16世紀中頃～後半と考えられる焼土面や岩盤掘込ピットなどが確認され、土師器皿・坏の他、15・16世紀頃の貿易陶磁器類も出土している。本書では昭和30～40年代の開発時に採集された遺物の報告も行なっている。</p>				

印刷：(株)印刷センター

〒863-0016

熊本県天草市城下町3-17

電話 (0969) 22-2857

FAX (0969) 22-2880

E-mail i-center@mx2.amakusa.ne.jp